霜野おつかい
イラスト イセ川ヤスタカ

君が裏切る前に、ちょっと私を殺してください

World End Chronicle
Before you betray the world
Story by Shimono Otsukai
Art by Isegawa Yasutaka

ワールドエンドクロニクル

特別試読版 ep5

GA文庫

相反する少年少女が
世界を再構築する
ヒロイックファンタジー!

世界を救うため、
彼女と手を取り合い戦え——

私が世界を
滅ぼす前に、
どうか私を

すったもんだあった次の日の朝。

災厄王女ことリィンの屋敷は、いつもと様子が違っていた。

平時は固く閉ざされているはずの門が開かれ、屋敷の呼び鈴が鳴らされたのだ。

その玄関前でびしっと敬礼を決めるのはサクラである。

はきはきとしたその明るい声は、朝の日差(ひざ)しのもとでとびきりはっきり響きわたった。

「本日よりこちらに出向になりました、見習い魔道騎士

のサクラ・ナデギリと申します！　よろしくお願いいたします！」

「クロウ・ガーランドでーす……よろしくっすー」

その隣で、クロウも形ばかりのあいさつを述べてみせた。

サクラとは対照的にその顔色はひどく悪いし、その自覚はもちろんあった。

「ああ、こちらこそよろしくな」

そんなふたりを出迎えてくれたのはトリスである。

いつもの魔女っ娘（こ）科学者スタイルで、彼女は快活（かいかつ）に笑う。

「いやあ、この屋敷で朝から元気な声を聞くなんていつ

ぶりだろ。あたしとリィン以外は魔道人形のメイドしかいないから、基本は静かなもんなんだよ」

「あっ、す、すみません！　つるさかったですか……？」

「そんなことないさ。こう、なんて言うのかな。新鮮であたしは好きだよ」

「っ、ありがとうございます！」

サクラは顔をぱあっとほころばせ、ぐっとこぶしを握ってみせる。

「誠心誠意、姫様のお役に立てるようがんばります！　どんな仕事でも任せてください！」

「うんうん。できる限りでいいからね、頼らせてもらうよ」

気合を入れるサクラに、トリスは目を細めて笑う。

一見すると和(なご)やかな光景に、クロウは詰めていた息を吐き出した。

（……歴史ってのはここまで変わるもんなんだなあ）

かつての未来では、ここに配属されたのはクロウのみ。

サクラはリィンと顔を会わせたことすらなく、災厄王女の悪評を怖がって、護衛に抜擢(ばってき)されてしまったクロウのことをずっと気にかけてくれていた。

それが今ではこうである。歴史がここまで変化すると

は思ってもみなかった。

クロウがため息をこぼしているうちに、トリスとサクラの話は進む。

「それじゃさっそく仕事を任せようと思うんだが……今日はサクラに頼める仕事がないんだよな。うちの姫様ったら今朝（けさ）からちょっと調子が悪くてね。自室で寝込んでやがるんだ」

「ええっ、それって大丈夫なんですか!?」

「薬を飲ませたから平気だよ。こないだのパーティでの疲れが出たんだろうなあ」

「リィン様……」

瞳（ひとみ）をうるませて、屋敷を見上げるサクラ。

一方で、クロウは首をひねるのだ。

（あいつ、そんな繊細なやつだっけ……？）

すくなくとも、昨夜は殺しても死なないほど活力が有

り余っていたと思う。

「ま、あたしもクロウもこれから出張だからさ。そういうわけだから、今日は――」

「わかりました！」

トリスの言葉を遮（さえぎ）って、サクラはびしっと敬礼する。

「姫様がお休みのところに騒がしくするのも悪いですし……本日は街の自主パトロールに行ってまいります！

またね、クロウくん！」

そう敬礼を残し、サクラは踵（きびす）を返して出ていった。

残されたトリスは苦笑をこぼす。

「今日は非番で、って言おうとしたのになあ……」

「あいつはそういうやつですよ」

超がつくほど真面目(まじめ)で、一直線。
しかしそれをリインに発揮しないでほしいなあ……とクロウはため息をこぼすのだ。
「それにしても……サクラがリインの護衛になるって話、今からでもなかったことになりませんかねえ」
「いやあ、無理だろ。あの調子だったら当人が譲らないって。あたしも注意してやるから心配しなさんなっての」
「無茶言わないでくださいよ。魔神の呪(のろ)いも危ないですけど……リインがもし世界を滅ぼすってなったら、真っ先に利用されるポジションじゃないですか」
「ふーん。それは経験に基づくアドバイスかい？」
「ぐっ……そうですよ！　国を滅ぼすような壮絶なハニ

ートラップに引っかかったバカ野郎からの忠告です！」

「素直でよろしい」

トリスはにたりと笑ってみせる。

「ま、本音を言うとね、リィンの話し相手になってくれたらいいなーって〇Ｋしただけなんだよ。危ない仕事を任せる気はないし、もともと全力でサポートするつもりだったからさ」

「うっ……たしかに俺もろくな仕事なんて任されませんでしたけど」

護衛なんて名目だけで、振られる仕事は雑用ばかり。

あとの時間は、だいだいリィンの世話を焼いて過ごしていた。

その間に危ない目に遭ったことは……ほとんどなかったと思う。

「それにしても。おまえさんはサクラより自分の心配をした方がいいんじゃないのかい？」

「へ……？　いやまあ、たしかに妙な事態に巻き込まれちゃっていますけど……自分の身くらい自分で守れますよ」

「いやいや、そういう話じゃないよ。たしかおまえさんは未来の『あたし』と親しかったんだよな？」

「えっと……そうですね。影導魔術なんかを教えてもらって、師匠みたいなもんでしたね」

「だったら知ってるはずだ。あたしが、なんでリィンの世話をしているか」

「……英雄イオンにたのまれたんでしたっけ」
「そう。『三百年後に呪われて生まれてくるはずの、僕の子孫をよろしく』ってね」
トリスは口角を持ち上げて薄く笑う。
それはいつもの皮肉げな表情とはどこか異なり、かすかな冷気を感じさせるものだった。
「あたしはその約束を果たすために、谷に戻らずこの国にとどまった。そして十五年前にリィンが生まれて……以降ずっと面倒を見てきたんだ。いわば、あの子はダチの忘れ形見みたいなもんなのさ」
未来の世界でよく聞かされた言葉である。
聞きなれたはずのそれにかすかな凄味を覚え、クロウ

はごくりと生唾（なまつば）を飲み込んだ。

クロウの胸――心臓のあたりに人差し指を突きつけて、トリスは告げる。

「そんなダチの忘れ形見を、おまえさんは殺そうとしたんだ。あたしが敵に回る可能性を……想像したりしないのかい？」

「っ……」

まるで天気の話でもするような、あっさりとした声色（こわいろ）だった。

だからこそ本能で理解する。彼女は間違いなく本気だと。

「おまえさんの事情は理解している。影導魔術を使える

ところをみるに、未来であたしの弟子だったってのも本当なんだろう。だが、今のあたしからしてみれば単なる他人だ。その線引きはしっかり頼むぜ」

「……わかりました」

クロウはようやくその一言を絞り出した。未来の世界で彼女が協力者だったからといって、この時代でもそうだと限らない。距離感を見誤っていた己（おのれ）を恥じる。

だが、しかし――。

「でも……これだけは言わせてください」

「うん？」

「俺には未来を変えるっていう使命があります」

トリスの目を見据えて、クロウは噛（か）みしめるようにし

て言葉を紡ぐ。

「だからそれが終わるまで、意地でも死ぬわけにはいきません。たとえトリス様といえど……簡単に殺せるとは思わないでください」

「ふうん。それ相応の覚悟があるってわけか」

「そのとおりですよ。なんたって国を滅ぼした主犯はリインでも、俺はその共犯ですからね」

たとえそれが意図しないものだったとしても。

間違いなく、クロウには償うべき罪がある。

「なるほどね。だがもしも……おまえさんが死ねば未来が変わるとわかったら。いったいどうするつもりだい？」

「そのときはお手を煩（わずら）わせるような真似（まね）はしませんよ」

「かははは！　言うねえ！」
「うおっ」
トリスはばしっとクロウの背中を叩いてみせる。
小さな体に似合わずその力はかなり強く、おもわずたたらを踏んでしまった。
「すこしは気に入ったよ、若人。おまえの処遇、ひとまず保留にしといてやるよ」
「はあ……ありがとうございます？」
「ところでひとつ聞きたいんだけどさあ……」
ふと、トリスが声をひそめてみせる。
「おまえさんの歴史でリィンがこの国を滅ぼした後……『あたし』は何か言ってたか？」

「はい？　いえ、特には……」

かつての未来の記憶を呼び起こす。

国がめちゃくちゃになってからトリスと落ち合い、すべての顛末（てんまつ）を打ち明けたとき。

彼女は表情の抜け落ちた顔でただ『そうか』とだけ言った。

「なんだかあっさり受け入れたみたいでしたね。でもそれからめっきり口数が減ってたから……ショックだったとは思います」

「ふうん。リィンの未来でも同じ反応だったみたいだが……我ながらつまらない女だね」

トリスは皮肉げに唇を尖（とが）らせる。

その反応にクロウはかすかな違和感を覚えるのだが……。

「まあいいや。とりあえず仕事の話に入ろうか」

手早く話を切り替えて、トリスがぱちんと指を鳴らす。

ぽんっと軽快な音とともに虚空(こくう)から舞い落ちてくるのは一通の封筒だ。

それを人差し指と中指でつまみ取り、クロウへずいっと差し出してくる。

「さあ、昨日言った任務だ。この国の聖遺物の無事を確認して来い」

「……かしこまりました」

クロウはその封書をしっかりと受け取った。

脳裏(のうり)に蘇(よみがえ)るのは昨夜交わした会話だ。

一時休戦が決まってから、トリスはふたりを前にしてあらためて切り出した。

『そんじゃ、いっちょあたしも協力させてもらおうかな』

『……そう言っていただけると心強いです』

『さすがに世界の危機だって言われちゃ見て見ぬふりはできねえさ。でも……マジで聖遺物が盗まれるのか？所在不明の道標輪廻はともかくとして五つとも全部？』

『そうよ。何度も言ってるじゃないの』

『ふーむ、だが聖遺物つったら、一級封印指定の魔道具だぜ？』

この世界をかつて脅威に陥(おとしい)れた、魔神が所持していた魔道具たち。

常軌を逸した力を有しているうえに、それらがすべて集まったとき、ふたたび魔界への扉が開くという厄介な伝説までついている。

『中でもこの国の保管体制は特に厳重だと思うがね。どこにあるか知ってるだろ？』

『そりゃまあ有名ですし。ね』

魔道騎士の西方支部ですよ

魔道騎士の拠点は国内各地に存在し、日夜治安維持に努めている。

最も大きいのが都の本部。それに次ぐ規模を誇るのが西方支部だ。都から半日ほど歩いた田舎（いなか）にあるものの、広大な自然を生かした訓練施設や倉庫などが併設されて

いる。

そして、そこの巨大な宝物庫に納められているのが――。

『……黒陽剣（こくようけん）、ね』

リィンが暗い声でぽつりとつぶやいた。

魔神の聖遺物のひとつ。黒陽剣。

漆黒（しっこく）の雷を広範囲に放つ驚異的な魔道具だ。

未来でのクロウは、それを所持する『リィン』に敗北した。そして、それは同じ歴史をたどったリィンも同じなのだろう。ふたりして似たような苦い顔をしてしまう。

一方でトリスは肩をすくめてみせるのだ。

『そう。その黒陽剣だ。あそこの封印は、あたしやほかの一級術師たちが協力して施した特別製でね。十年に

一度の状態確認以外ではネズミ一匹入れないはずだ。まあ、さすがにリィンが近付いたら解けちまうとは思うけど……』

『え、でも私が行ったときは開けっ放しになってたけど？』

『俺のときも同じですかね……』

聖遺物を盗み出してしまった、あのとき。

見張りの姿はどこにもなく、宝物庫の鍵（かぎ）も開いていた。

超厳重な封印がなされていると聞いていたのに、やけに拍子抜けしてしまったことをクロウはよく覚えている。

おかげでトリスは首をかしげて唸（うな）るのだ。

『そんなはずないんだけどなあ……うーん』

しばし悩んでから――「よし」と手を打つ。

『考えてても仕方ないな。明日は暇だし、ちょっくらあちこち回って聖遺物の管理体制をチェックしてくるよ』

『あ、それじゃあ……』

クロウはさっと手を挙げて口を挟む。

『黒陽剣の方ですけど、俺が確認してきちゃダメですか？』

『へえ？　おまえさんが？　なんでまた』

『自分の目で、見てたしかめたいっていうか。ほかにできることもないですしね』

当初の目的が失われた今、とにかくなにか行動したかった。

そこでリインがふんっと鼻を鳴らす。

『あなたにしては考えたものね。だったら私も――』
『バカ言え。おまえは留守番に決まってんだろ』
『なんでよ!?』
『まー当然だろうな。こないだのパーティを忘れたのか？　おまえが西方支部になんか顔を出しちゃ、大パニックが起こるに決まってる』
『うぐっ……だ、だからって、こいつひとりに行かせるなんて危険すぎるでしょ!?　また盗むかもしれないじゃない！』
『盗むわけないだろ……おまえじゃないんだから』
『なんですってええええ!?』
『まーまー、騒ぐなっての。いいぜ、クロウ。そこまで

言うなら見て来いよ。そんで……盗めるもんなら盗んでみやがれ』

『だから盗みませんってば！』

回想終了。

「あのときは『マジでこいつやらかすかもなー。ま、そのときは始末すりゃいいだけだしー』って軽く考えてたんだけどさ」

「せめてもうちょっと殺意を包み隠してくださいよ」

目の前のトリスは、昨夜と同じ意地の悪い笑みを浮かべている。

だがその目に浮かんでいるのはほんのすこしの信頼で――。

「今回は、おまえさんの人柄を見極(みきわ)めるいい機会かもしれないな。ちゃんとその目で黒陽剣の無事を確認しておいで」

「……ありがとうございます」

クロウは深く頭を下げて、封書を懐(ふところ)にしまうのだった。

そんな彼の様子をトリスはにやにやと笑って見守るだけだった。

「そんじゃ、道中大変だと思うけど、くれぐれも気を付けてな」

「え、なに言ってるんですか。気を付けるほどの道のりじゃないですって」

西方支部は、ここから歩いて半日ほどの距離である。

今から出ればどんなアクシデントがあったとしても今日中に帰ってくることができるだろう。寂(さび)れてはいるものの、街道もきちんと整備されているし。

そのはずなのに……トリスは口の端(は)を上げてかすかに笑うのだ。

「……その道中、厄介な荷物が増えたとしても？」

「はい？　それってどういう――」

「そんじゃ気張れよ、若人！」

「うおっ!?」

ぱちんと指を鳴らしたその瞬間。

ふたりの間をつむじ風が駆け抜けて、気付けばもうトリスの姿は消えていた。

ひとり残されたクロウは呆然（ぼうぜん）とするほかなくて。

「厄介な荷物って……いったいなんだ？」

思い当たるものはなかったが、なぜか背筋がうっすらと寒くなった。

そして、その正体は十分もしないうちに判明する。

「死ねっっっっっ！　《天斬（あまきり）》！」

「ぎゃあああっ!?」

あわてて飛びのくのとほぼ同時、踏み出しかけた地面が爆（は）ぜた。

クロウが街道を歩きだしてすぐのことだ。

辺鄙（へんぴ）な地方に向かう道のせいか前にも後ろにも人影は

なく、たまに馬車とすれ違うだけだった。おかげで小鳥がさえずる林のなかをのんびりと歩いていたのだが……

突然、殺気が奔(はし)ったのだ。

しかも野盗や低級の魔道生物といったザコとは一線を画する、切れ味鋭いものだった。

周囲の小鳥もぴたりと鳴き止み、全身が総毛立(そうけだ)って……今である。

地面に刻まれた深い轍(わだち)。まるで巨大な獣が爪(つめ)を突き立てたかのようなありさまだ。

そしてもうもうと上がる砂埃(すなぼこり)の向こうに、襲撃者の影が見える。

小ぶりなナイフを携えたその人影は――。

「ちっ……やっぱり勘がするど……うきゃあああ⁉」

突然なぜだか苦しみだして、地面にしゃがみこんでしまう。

砂埃が晴れたあとには……リィンが頭を抱えて涙目になっていた。

「うううう……魔神だけじゃなくて指輪にまで呪われるとか……災難にもほどがあるわよぉ……」

「なんでだよ⁉」

万感の思いが乗ったツッコミだった。

それに、リィンは「はあ？」と顔をしかめてみせる。

その身にまとうのはパーティ会場で見せたような華美なドレス……ではない。

白いワンピースにつば広帽子、白手袋という、良家のお嬢様スタイルだ。

一見すると楚々（そそ）とした出で立ちなのだが、ワンピースがタイトなデザインであるために胸元（むなもと）が強調されていて、短めのスカートから伸びるのは普段のドレス姿だとほとんどお目にかかれない生足だ。

眼福と言っても差し支えないビジュアルなのだが……それに見惚（みほ）れる余裕などクロウは持ち合わせていなかった。

「なんでおまえがここにいるんだよ!?　寝込んでるはずだろ!?」

「そんなの仮病に決まってるじゃない」

リィンは堂々と言ってのけるし。

「私だって聖遺物が無事かどうかこの目でちゃんと確認したいもの。あなたっていう危険因子を野放しにできるはずもないしね。だから待ち伏せしてたってわけ」

「予想通りの返答をありがとよ！　つーかそのナイフ、こないだ俺が持ち込んだやつじゃ……」

「私の屋敷で拾ったものをどうしようと勝手でしょ。ちょうど軽くて持ちやすいのよね」

「まあ安物だったからいいけど……それじゃ最後に、もう一つ聞きたいんだけど」

クロウは重いため息を吐き出して。

「さっきの一撃。おまえあれ、本気で俺を殺す気だった

よな……？　指輪のこと、もう忘れたのかよ」
「失礼な人ね。もちろん覚えてるわよ」
リィンはふんっと鼻を鳴らす。
「いまのはただの条件反射よ。その腑抜けた顔を前にすると……無性に血が見たくなるのよね」
「ただの狂戦士じゃねえか！」
お嬢様スタイルで言い切るのが最高にシュールだった。
もうツッコミを入れる気力も品切れだ。
ぐったりと肩を落とすクロウに、リィンはびしっと人差し指をつきつけてみせる。
「ふんだ、なんと言われようとも地の果てまでついて行ってやるんだから！　こっそり出てきたからトリスにも

バレてないと思うし！」

「いや……たぶん気付いてるぞ、あの人」

厄介な荷物とは、十中八九リインのことだろう。

今になって気付いても後の祭りだ。

（それにしても……ダチの忘れ形見を俺なんかに任せていいのかよ）

指輪があるから、真っ向きって殺せはしないが。

昨夜命を狙（ねら）ったばかりの男に接触させるなんて、どう考えても釈然としなかった。

考え込むクロウをしり目に、リインはそっぽを向いて歩き出そうとするし。

「ぼやぼやしてないで早く行くわよ。じゃないと日が暮

れ――」

「あっ、こら待て！」

「っ……！」

おもわずその手を掴(つか)んで、引き留(と)めてしまった。

リィンははっと息をのんで、固まり、めいっぱいに見開いた両目をこちらに向ける。その瞳に浮かんでいるのは恐怖か嫌悪か、判別するより先にばしっと手が振り払われた。

「きゅ、急になにするのよ！　乱暴者！」

「いやだって、おまえさあ……」

クロウは半目で、彼女が向かおうとした先を指さす。

「そっち、反対方向だぞ」

「……西ってこっちじゃないの？」
「地図が上下逆さまだし、縮尺もおかしいし……」
広げた世界地図と、にらめっこを始めるリインだった。
頭の上には大きなハテナマークが躍っている。
「おまえ……本当に中身は二十五歳なのかよ」
「よ、余計なお世話よ！」
リインはまなじりをつり上げてクロウをにらむ。
しかしそうかと思えばしゅんっと肩を落としてみせて――。
「だってしかたないじゃない……。トリスがいなくなっても、魔道人形をいっぱい残していてくれたから身の回りのことには困らなかったけど……修行ばっかりで、ひ

とりでの出歩き方なんて覚える暇なかったんだもん」
「箱入りお姫様はいつまでたっても箱入りかあ」
「うるさいっ！」
頭から湯気を出して怒鳴るリインだった。
たぶん彼女を撒く（ま）ことは容易だろう。
だが、歩く危険物である彼女から目を離すのは得策ではないし、もしも迷子にでもなってしまえば、あとでトリスにちくちくやられるのは目に見えていた。
そうした面倒ごとを考えると……選択肢などひとつしかない。
「しかたないな……今日のところは俺が案内してやるよ。ただし」

リィンの鼻先に人差し指を突きつけて、低い声で告げる。

「これ以降は無駄な喧嘩（けんか）を吹っ掛けるのはやめてくれ。それがのめないって言うんなら、山の中とかで置き去りにしてやるからな」

「……わかったわよ」

リィンはしぶしぶうなずいて、歩き出したクロウの後を小走りで追った。

そんなわけで、人通りの少ない街道をふたりは進むことになる。

「……」

「……」

十分後。

ふたりは同じ街道を、ただひたすらに歩き続けていた。

行けども行けども景色にはほとんど変化がなく、目的地が近付いている気配もない。

そんな閉塞感（へいそくかん）もあいまって互いの形相（ぎょうそう）は険しく、まとう空気はぴりぴりと張りつめている。

マッチを一本こすっただけで、あたり一面が焦土に変わりそうなほどだった。

もちろん会話などあるはずもない。両側の林から聞こえる鳥のさえずりが、空々しく響く。

（く、空気悪っ……！　かといって無理に話すようなことなんて……あ）

そこでクロウはふと、気になっていたことを思い出すのだ。

「……あのさ。ひとつ聞きたいことがあるんだけど」

「な、なによ」

話しかけられるとは思っていなかったのか、リィンの肩がぴくりと跳ねた。

それを取り繕うようにしてふんっとそっぽを向く。

「くだらない質問だったら、その口を縦に切り裂いてやるんだから。それでもよければどーぞ」

「いや。おまえのいた世界じゃ、俺たちってどんな関係だったのかなって」

「っ……」

そこで、リィンの足がぴたりと止まった。
クロウもまた立ち止まり、彼女を振り返る。
「昨日も話したけど、俺の知る未来とおまえの知る未来はほとんど一緒だろ？　違いはどっちが裏切ったか、それだけだ。でも、ほかにも差異があるんじゃないかと思ってさ」
「……そんなことをたしかめて、いったいなんの意味があるのよ」
「意味はないかもしれない。でも、情報は多いに越したことないだろ？」
今はまだ右も左もわからない手探り状態。
どんな小さなことでも、ヒントになるものがほしかっ

た。

「一応、俺の未来だと、その……」

そこでクロウは言葉を詰まらせてしまう。

いざその単語を口にしようとすると胸の奥底がひどくざわついた。

「俺とおまえは……いわゆる恋人って関係だったんだけど」

「……そーよ」

リインはため息まじりに首肯する。

「私もあなたと……クロウ・ガーランドとは、こ……恋人だったわ」

「そこはやっぱり同じだな。出会いはやっぱりこのまえ

のパーティか？」

「そのとおりよ。それがきっかけで、あなたが私の護衛になるって言ったのが始まり。今回はどうしてだかあの子……サクラさんがそのポジションになっちゃったわけだけど」

「あ、ああ、うん。あれには俺も驚いたな」

しみじみうなずきつつ、あのとき顔を見合わせたことを思い出す。

あのときは思惑が外れて、互いに困惑していたというわけだ。

「それじゃ、初デートはどこだった？」

「ぐっ……そ、そんな恥ずかしいことまで聞くわけ？」

「そりゃ当然聞くだろ。確認作業なんだから」
そう。これはただの作業だ。
特別な感情など、発生するわけがない。
「かわりと言っちゃなんだけど、あとで俺にもなにか質問してくれていいぞ。ほら、どこだったよ」
「……わたしの部屋で、いっしょにお茶をしたのが最初かしら」
「うん、それも俺のときと同じだな」
とはいえデートはもっぱら屋敷の敷地内だけだった。
なかでもリィンの私室で過ごすことが多く、ふたりでいろんな話をした。
（そういや、あのとき初めて部屋に入れてくれたんだよ

な……）

ふんわり香る甘い匂（にお）いとか、女の子らしい小物なんかに、無性にドキドキしてしまったのをよく覚えている。

おまけにふたりしてずっと緊張しっぱなしで、会話も途切れがちだった。

でもけっして、気まずい時間でもなくて――。

（って、何を考えてるんだよ、俺は。相手は俺を裏切った女だぞ）

甘酸っぱい思いを振り払うようにして、あわてて口を開く。

「え、えっと、おまえも俺に聞きたいこととかないのかよ」

「それじゃあ……」

リィンはおずおずと口を開く。

「恋人になってから……あなたが私にくれたはじめてのプレゼントはなんだった？」

「ああ、街の露店で見かけたネックレスだったかな」

リィンの瞳と同じ色だったので、なんとなく買い求めたのだ。

模造石の安物ではあったものの、リィンは飛び上がるほどに喜んでくれた。しかし――。

「あれ、結局どうなったか覚えてるか？」

「……あなたからの贈り物なんて、今だったら即ゴミ箱行きだけど」

リィンは気まずそうに目をそらして、ぽつりと言う。
「あのときは大事に持ってたのに……出かけた先で失(な)くしちゃったのよね」
「そうそう。おまえ、あのときわんわん泣いたんだよな」
「う、うるさいわね……じゃあ私があげたプレゼントは覚えてるっていうの!?」
!?
「マフラーだろ？　こっそり毎晩編んでたやつ。あんまり見た目はよくなかったけどな……」
「ぐっ、覚えてるんだ……不格好で悪かったわね！」
「でも温かかったし。冬場は重宝したよ、あれ」
「そ、そうなの？」
「だから毎日つけて通ってたんだろ。それとも、そっち

の俺は一度もつけなかったとかか？」

「そんなことはないけど……でも、そう。そうなんだ」

「な、なんだよ、その反応は」

「別に！　なんでもないわよ！」

リィンはぷいっとそっぽを向いてしまう。

しかしその頬（ほお）がほんのすこしだけ朱色に染まっていることに気付き……クロウもはたと口をつぐむはめになった。

今度は先ほどまでとは異なり、ふたりの間にピリピリした緊迫感はない。

かわりに流れるのは、どこかむず痒（がゆ）い沈黙だった。

クロウの記憶とリィンの受け答えに、矛盾する箇所は

ない。向こうもそれは同じらしい。

だがそれを確認するのも、さらなる質問をぶつけあうのも、非常に困難なことだった。

（め、めちゃくちゃ恥ずかしくないか、これ……）

鏡を見なくても、顔が真っ赤に染まっているのがわかった。

リィンと恋人だった三年間を思い返すのは、ずいぶん久々のことだ。

なにしろいいように利用されて終わった恋である。当然ながら苦い記憶でしかない。

ずっと封印していたし、たまに思い出すことがあっても相手への殺意を燃え上がらせるための燃料でしかなか

った。

（あれ？　そうなると……こいつも同じなのか？）

今のところクロウの世界とリインの世界に、大きな齟齬（そご）はなさそうだ。

だったら彼女も――。

本気の恋をして、無残に散った。

……のか？

「おまえってさ……『クロウ』のことどう思ってたんだよ。本気で好きだったのか？」

「ふん。愚問ね」

リインはふぁさっと髪をかき上げてみせる。

頬の紅潮はすこし引いて、つんと澄ました横顔が実に

様になっていた。

「呪われていたって、これでも王族の姫なのよ。庶民なんかを好きになるわけないじゃない。あんなの、ただのお遊びだったわ」

「……手編みのマフラーまで渡したくせに？」

「た、ただの気まぐれよ！　そもそも始まりは……！」

リィンはまなじりをつり上げて、クロウに人差し指をびしっと向ける。

「あなたから私にこ、告白してきたんじゃない！」

「は……？」

「私はそれに合わせてあげただけで、好きでもなんでもなかったの！　わかった!?」

「いや、たしかに最初は俺から言ったけどさ……」
ふたりが男女の付き合いに発展するきっかけというのは、本当にシンプルなものだった。
クロウの方からリィンに『好きだ』と言った。ただそれだけ。
こうしてまとめると、こちらが一方的に好意を寄せたように見えるのだが……。
「実はさ……俺、告白した数日前に聞いちゃったんだよ」
「はあ？　なにを聞いたっていうのよ」
「おまえが自分の部屋で、魔道人形相手に俺のことをしゃべってたのを」
「は……っ～～～～!?」

数秒しっかりフリーズしたかと思えば、あっという間にその顔が真っ赤に染まった。

なんだか湯沸かし器みたいだ。

おもわず笑みがこぼれて、クロウはニヤニヤと続ける。

「なんだっけなー。『男の子を好きになるなんて初めて……』とか『どうしたら素直になれるのかしら……』とか『クロウに誰（だれ）か好きな子がいたらどうしよう……！』とか。小っ恥ずかしいことを延々とぼやいてたっけ」

「なっ……いつ!?　ど、どこで聞いてたのよ……！」

「裏庭だよ。あの日はちょうどトリス様から草むしりを言いつけられてな」

リィンが出かけることはほとんどないので、護衛など

ほとんど名ばかりの役職だった。
そのため、こまごまとした屋敷の雑務を任されることが多かった。
あの日も汗まみれになりながら雑草と格闘していて……ちょうどそれがリインの部屋の真下だったのだ。開け放たれた窓からこぼれるのは、赤面待ったなしの赤裸々な恋の悩みで。
だからクロウの方から告白した。
「それなのに本気じゃなかっただのなんだの……よく言うよなあ」
「うっ、うるさいうるさいうるさーーーい！」
癇癪（かんしゃく）を起したようにリインが吠（ほ）える。

こうなってはもう先ほどまでのすまし顔など見る影もない。

目じりに涙を溜(た)めてぷるぷる震える様は子猫のようだが、眼光は猛禽類(もうきん)のそれである。

「ええそうですよ！　めちゃくちゃすっっっごーーーーく！　好きだったわよ！　悪い!?」

「お、おう……そんな食い気味に断言されても困るんだけど」

「あなたが言わせたんでしょーが！　責任もってちゃんと聞けっ！」

やけくそとばかりにリィンは叫ぶ。

「この呪いのせいでお父様やお姉様たちとは滅多(めった)に会え

ないし、みーんな私のことを怖がって近付こうともしないし、話し相手なんてトリスか魔道人形しかいなかったのに……！　それなのにある日突然、同じ年ごろの男の子が優しくしてくれるようになったのよ⁉　すぐ根を上げて逃げ出すと思っていたのに、毎日話し相手になってくれて、挙句の果てに私が困ったときはちゃーんと助けてくれるし！　これで好きにならないわけがないでしょーが！　あーーーーーーー！　腹立つ！」

「あ、はい」

魂のこもったシャウトに、それだけ返すのがやっとだった。

リィンは肩で息をしてぐったりとうなだれるが、すぐ

にすっと真顔を向けてくる。

「あなたは？」

「……へ？」

「あなたは私のこと、どう思ってたわけ？」

「っ……！」

クロウはおもいっきり息を詰まらせてしまう。

先ほど自分が投げたのと、まったく同じ質問を返されただけだ。

たったそれだけのはずなのに、手足がしびれて舌がもつれた。じっとこちらを見つめるリィンの眼光は鋭く、逃げ道はどこにもないと悟る。クロウはごくりと喉（のど）を震わせて――。

「そ……」
「そ？」
「そこそこ……好き、だった
「そこそこぉ……？」
目をそらしがちに告げた一言で、リインの眉（まゆ）がぴくりと動く。
「へえー？　そこそこ好きな女のために、嵐（あらし）の日も大雪の日もお屋敷に通ったっていうの？　こまめに贈り物をして、甲斐甲斐しく世話を焼いたっていうの？　ふーん。ずいぶん重い『そこそこ』なのねえ」
「うっ、うるせえ！　おまえだって手編みのマフラーだけじゃなくて、ハート形のクッキーなんて作って渡して

きただろうが！　そっちのがよっぽど重いわ！」
「はあー!?　その粉っぽくて真っ黒焦げで、さらに塩と砂糖を間違えちゃったクッキーを美味(おい)しい美味しいって言って完食したのはあなたですけど!?」
「ああそうだよ！　俺だよ！　そのまま腹を壊して寝込んだわ！　でもそのバカを一晩中ずっと隣で看病したのはどこのどいつだよ！」
「私ですけど!?　なんか文句でもあるわけ!?」
「だったらいい加減に認めろよ！　おまえの方がよっぽど俺のことを好きだったって！」
「違うわよ！　あなたの方がずーっと私のことを好きだったはずよ！　絶対に！」

そのままふたりは至近距離でにらみ合う。
鼻先がくっつきそうなほどだが互いに羞恥心（しゅうちしん）など抱（いだ）く余裕はない。
いつしか天気はひどく怪しくなっていた。空は今にも泣きだしそうな曇天（どんてん）で、湿った風がふたりの間を駆け抜ける。そして、それが合図となった。
「ここまで言ってもまだ認めないって言うのなら仕方ねえな……！」
「ええまったくそのとおり！　頑固者相手にはこれしかないわよね！」
ふたり同時にばっと飛びのいて距離を取り、腰を低く落として臨戦態勢。

バチバチと見えない火花を散らし、喉を潰(つぶ)さんとばかりに叫ぶことには――。

「「殺してでも……めちゃくちゃ好きだったって認めさせてやる！」」

こうして、ひどく虚(むな)しい激戦が幕を開けたのだった。

「や、やっとここまで来たか……」

「うっ、ううう……つかれた」

すっかり日も暮れたころ。

クロウとリィンは、街道沿いの町の入り口に立っていた。

ふたりとも泥まみれのかすり傷だらけで見るも無残な

ありさまだ。とはいえお互い出血するほどの怪我ではないし、骨も折れていない。ダメージとしては軽微なものだ。

だが、それ以上の倦怠感がふたりにずっしりとのしかかっていた。

クロウは盛大な舌打ちを飛ばしてリインをにらむ。

「ちっ……おまえのせいで行程の半分も行かなかったじゃねーか。どうしてくれるんだよ」

「はあ？　あなたがいつまでたっても素直にならないからでしょ」

「あ？　なんだその言いぐさ。やんのか？」

「そっちこそまだやる気？」

ふたりはまたも火花を散らし合い……しかし、今度はどちらともなくスッと視線を外す。

「……やっぱやめるか」

「……不本意だけど賛成よ」

同時にため息をこぼすふたりだった。

あの戦いは夕刻まで続いた。とはいえ——。

『もらったっ、あだだだだだだああ⁉』

『覚悟っ、いにゃあああああああ⁉』

相手にとどめを刺そうとするたび、お約束とばかりに指輪が熱を持ち、ぎりぎりと頭が痛んだのだ。

おかげでまともな戦いになるはずもなく、戦っていた時間より、痛みにもだえ苦しんでいた時間の方がはるか

に長い。
得たものなど何もなく、むしろいろんなものを失った気がする。
「まったく……こうなるってわかってたでしょ。それなのに真正面からケンカを吹っ掛けるなんて、ほんっとバカな男よね」
「最初からケンカ腰だったのはむしろのおまえの方じゃ……いや、いいよ、もうそれで」
これ以上言い争っても疲れるだけだ。
こちらをにらむリィンに、クロウは肩を落とすだけだった。
（ほんっと可愛げの欠片もねえな……なんで俺、こん

な女を好きになったんだろ）

これに比べたらサクラなんて可愛さの塊だ。

おかげであの天真爛漫（てんしんらんまん）、裏表のないほわほわしたキャラクターが無性に恋しくなってくる。

（できたら今すぐ帰りたいところなんだけどなあ……）

頭をぼりぼりかきつつも、クロウは地図を広げてみる。

この先で街道は山へと入り、それを越えた先に西方支部がある。

だが山の標高はけっこうなもので、日中ならまだしも夜の行程は億劫（おっくう）なものになるだろう。

「しかたない。今日はもうここで宿を取るしかないな」

「えっ……？」

「なにを驚いてるんだよ。当然の流れだろ」

夜は野生動物や魔道生物、さらには野盗が活発になる。

なにが襲ってきたところで撃退できる自信はあるが、ここまで疲弊した状態ともなると下手（へた）な交戦は遠慮したい。

そうつらつらと説明するが、リインの反応は芳しくなかった。

先ほどまでの得意げな笑みは消え失せて――。

「……そう」

硬い面持ちで、ただじっと目の前の町を見つめるだけ。

不思議な反応にクロウはすこし首をかしげるが、気にせず歩き出す。

両足はすっかり棒のようだ。早くシャワーを浴びてひ

と眠りしたかった。

「いいから行こうぜ。ひょっとして金を忘れたか？　抜けてるなあ。だったら一晩分くらい貸してやってもって、あれ？」

振り返れば、リィンはその場に立ち尽くしたままだった。

彼女が立っているのは町と街道のちょうど境のあたりだ。

人工の光がかすかに届くものの、今にも闇（やみ）に溶けてしまいそうなほどに薄暗い。

「おい、なに突っ立っているんだよ。早く――」

「私はそっちに行けないわ」

「へ」

「忘れたの？　私は災厄王女よ」

リィンは口の端をほんのわずかに持ち上げて笑う。

夜闇の中であってなお、その自嘲（じちょう）気味の表情はよく見えた。

「あんなふうに大勢の人が暮らす場所には行けないわ。呪いのせいで迷惑をかけるかもしれないし……万が一私の顔を知っている人がいたらパニックになるもの」

「それはそうかもしれないけど……じゃあ、おまえはどうするんだよ。引き返すのか？」

「勝手に野宿でもするわよ。あなたには関係ないでしょ」

そう言い切って、リィンはくるりと背を向ける。

細く華奢（きゃしゃ）な少女の身体だ。

しかし、しゃんと伸ばした背筋からは強い決意がうかがえた。

「それじゃ、明日の朝にここで集合よ。逃げたら承知しないんだから」

ひらりと手を振るリィンのことを、クロウはただ見送ることしかできなかった。

なにしろ彼女の言うことは一部の隙（すき）もなく正しいからだ。おまけに休戦を結んでいるといっても、クロウにとって彼女は敵だ。引き止める理由などあるはずがなかった。

やがてその姿が闇の中に消えたころ――。

「ったく……勝手にしろよ」

彼はやっぱり頭を掻(か)きながら、ひとりで町へと向かったのだった。

小さな町ではあったが、旅人向けの宿屋も、食堂や商店などもいくつかあった。

宿を覗けば空室ばかりで、クロウはひとりで部屋を取って、悠々(ゆうゆう)と惰眠(だみん)を貪(むさぼ)ることができる……はずだった。

それなのに――。

「……俺はいったいなにをやってるんだ？」

一時間後。

クロウはずっしりと重い麻袋をかついで、山中をさまよっていた。

そろそろ日付の変わる時間帯ということもあって、墨を垂らしたような闇がどこまでも続く。

おまけに風もない静かな夜であるため、クロウの足音だけがやたらと大きく響いてしまった。

夜気はそれほど冷えてはいないが、そのぶん湿気が高くて肌がべたつく。

蚊(か)もヒルも多く、どう考えても安宿の薄いベッドの方が快適だったことだろう。

それなのに、クロウは影の腕であたりの枝葉をばっさばっさと薙(な)ぎ払(はら)いながら獣道を進む。

「えーっと、気配はこっちなんだけど……おっ？」

ちゃぷ。

集中させた耳に、かすかな水音が届いた。

迷わずその方向へと足を向ける。

すると案の定、木立の間から小さな明かりが確認できた。

足音を立てないように慎重に進めば、水音はさらにはっきりしてくる。もっと近付こうとしたのだが――。

「へくちっ……」

小さなくしゃみが聞こえてきて、ぴたりと足を止めた。

よくよく目を凝らしてみれば、どうやらそこは河原であるらしい。

浅い川がゆるやかに流れており、まわりには苔（こけ）むした岩がごろごろと転がっている。

そしてその川の中ほどで……リィンが一糸まとわぬ姿で水浴びをしていた。

すぐそばの焚火（たきび）が照らし出すのは、瑞々（みずみず）しくも火照った素肌。

細い首筋を玉のような雫（しずく）が滑り、深い胸の谷間に吸い込まれていく。

着ていた服はきちんと畳まれて岩の上だ。その一番上には淡いピンクの下着がひとそろいちょこんと乗っている。細かなレースのついたブラジャーはやっぱりかなり大きめだった。

（あ、ヤバい。バレたら死ぬわ、これ）

正確には、指輪のおかげで半殺しで済むのだろうが。

それでもこれまでで一番死を直感し、クロウはそろりと後ずさろうとする。

しかし――。

「はあ……」

小さな溜息（ためいき）とともに、リィンがこちらに背を向ける。

おかげでクロウはぴたりと足を止めてしまった。

彼女の白い背中が、月明かりのもとに浮かびあがる。

その肩甲骨のすぐ下あたりに刻まれていたのは、奇妙な痣（あざ）だ。羽を広げた蝶（ちょう）のような意匠のそれは、彼女が生まれたときからあったという。

（あれが……魔神の呪いの証（あかし）ってやつか）

まじまじと見つめてしまうクロウに、リィンが気付く

様子はない。

彼女は肌を撫(な)でさすりながら、空に浮かぶ月を見上げる。

今日一日ずっとつり上(あ)がっていた目はとろりと落ちて、すっかり気の抜けた表情だ。

しかしどこか雨に打たれた子犬のような、しょぼくれたオーラをまとわせていた。

「なんとか火は起こせたし、水浴びもできたけど……これからどこで寝ようかしら……お腹(なか)すいたし、暗いし、虫も多いし……はあ」

ぶちぶちとつぶやいて、まったため息。

しかし急にハッとして、勢いよくかぶりを振るのだ。

「いいえ！　しっかりしなさいリィン！　こんなことでへこたれていちゃいけないわ！　私には未来を変えるっていう使命があるんですもの！　そもそもこんな思いをしているのも……全部あの男のせいじゃない……！」

いや、言いがかりにもほどがあるぞ。

内心でそんなツッコミを入れているうちに、その声には怒気が混ざっていくし。

「いまごろあいつは宿屋のベッドの上だと思うと、なおムカムカするし……！　なにが『そこそこ』好き、よ……ほんっとふざけるんじゃないってーの……！」

そこまでぶちぶちとこぼしたところで。

リィンは突然ざばっと立ち上がってーー。

「見てなさいよ！　いつか絶対にぶっ殺して……へ？」

「あっ」

身を低くかがめたクロウと、しっかり目が合ってしまった。

ふたりの間に遮るものはなにもない。

リィンの形のいい胸からその頂き、ちいさいおへそも、下腹部に至るまでが丸見えで――。

「っっ、きゃあああああああああああああああああああああ！」

「ごはっ⁉」

絹を裂くような悲鳴とともに。

山林一帯を揺るがすほどの轟音（ごうおん）が響き渡った。

とっさに身を伏せたクロウがゆっくり顔を起こしてみれば……あたりの木々が見渡す限りにきれいさっぱり切り倒されていた。旅人が通りがかったら、巨人でも暴れたのかと目を丸くすることだろう。

リィンがいたはずの水面にはぶくぶくと泡が立っている。

おかげで、クロウは素直に頭を下げるしかなかった。

「いや……うん。さすがにこれは俺が悪いと思うわ。すまん」

「ぶはっ！　なっ、なっ、なんで⁉」

ざばっと川面から顔を出して、リィンがびしっとナイフを向ける。

片手で胸を隠しつつ、顔は真っ赤に染まっている。風邪を引いたわけではないことくらい、クロウにもわかった。

「あなた、さっき私と別れて町に行ったはずでしょ!?　なんでここに……はっ、まさか覗(のぞ)き!?　覗きをするために戻ってきたっていうわけ!?　これ以上ぶっ殺さなきゃいけない動機を増やさないでくれる!?」

「勝手に結論を出すなってーの。町にはたしかに行ったけどさあ」

クロウは持ってきた荷物を下ろす。

その中身はふたり分の……。

「食糧とか毛布とか、タオルとか。必要そうなものを買

いそろえただけだ」
「へ……？」
「ああ、それと。この先に小さな小屋があるんだよ」
ぽかんとするリインに、来た方角をあごで示す。
「持ち主さんに直談判（じかだんぱん）したら、一晩だけなら貸してくれるってさ。さっき見てきたけどわりときれいだし、小さいけど井戸もある。あたりに住んでる人もいないし、おまえも呪いを気にせず休めるだろ」
「……なんで？」
「うん。当然の反応だよな。俺もそう思うから」
言うなれば、これは過剰なまでのお節介だ。
おまけに相手は、本気で殺そうとさえ思った女。

だが、不思議とここに来るまでに迷いはなかった。

「おまえはたしかに俺の敵だよ。でも女を山中に放置して安眠できるほど、俺は図太くないんでね」

「あなた……ひょっとしてバカなの？」

「うるせえ。んなこた百も承知だ」

怪訝（けげん）な顔をするリィンに背を向けて、その場にどかっと腰を下ろす。

「あと三分だけこうして待っててやるよ。だからとっとと上がって服を着てくれ」

手を振って促してみるが、ただ呆（あき）れたようなため息だけが返ってくる。

そのまま憎まれ口でも飛んでくるのかと思いきや。

水音にかき消されてしまいそうなほどの、小さな笑い声が耳朶をくすぐった。

「……ほんと優しい人よね。昔とちっとも変わってないわ」

「っ……！」

予期せぬ柔らかな声色に、クロウはびしりと固まった。しかしその動揺を悟られたくなくて、もつれる舌を無理やりに動かす。

「あ、あはは……なんだよそれ。女が男を無難に褒めるときの常套句じゃねえか」

「あら、リップサービスくらい素直に受け止める度量もないの？　小さい男ね」

言葉は刺々しいが、鈴を転がすような笑い声はひたすらに甘い。

すっかり毒気を抜かれたようにリィンは続ける。

「一時休戦って言っても……あなた、本気で私のことを殺すつもりでしょ？　恨みの感情も本物だわ」

「……それはお互い様だろ」

「まあね。でもあなたはこうして、殺したい女のことも気遣うことができる」

かすかな水音が響き、気配が近付く。

リィンがすぐそばの岩に腰かけたようだった。

背中越し、わずかな距離を空けて気配が伝わる。

春先の外気の中では生ぬるいはずのそれが、むしろ

火傷(やけど)しそうなほどに感じられた。
リィンはなんでもないことのように、告げる。
「私はあなたの、そういうところが好きだったのよ」
「……俺も」
彼女の告白は、まるで単なる挨拶(あいさつ)であるかのようにあまりに自然なものだった。
だからクロウも口を滑らせてしまうのだ。
「昼間は『そこそこ』とか言ったけどさ。俺もおまえのこと、すっごく好きだったよ」
背中越しに緊張が伝わる。しかしクロウはかまわず続けた。
「呪いのせいで苦しんでるのにさ、そんなのを二の次に

して見知らぬ他人を心配できる。逆境に負けない強さもある。そんなのを全部ひっくるめて……好きだった」

「……そう」

リィンはちいさくうなずいて、クロウの言葉を噛みしめているようだった。

そっと息をのんで――。

「でも私は、あなたのことをもう愛せないわ」

「奇遇だな。俺もだよ」

しばしふたりの間に沈黙が落ちる。

かすかな虫の音がそこに滑り込み、夜の闇がなお深まったようだった。

そんななか、リィンがそっと動いた。滴(したた)り落ちる雫(しずく)が

地面を叩く。

「そろそろ上がるけど、そのまえに……ねえ、ひとつ聞いてもいい？」

「なんだよ」

「……どうして？」

それは、縋（すが）るようなか細い声だった。

クロウはそっと後ろを振り返る。

月明りのもと、白い裸体を晒（さら）しながらリィンは真っすぐにこちらを見つめていた。

耐え切れないような痛みに苛（さいな）まれるようにして眉を寄せ、震える唇で言葉を紡ぐ。

「未来のあなたは……どうして私を裏切ったんだと思

う？」

「……そんなの俺だって知りたいよ」

絞り出した声は、リインに負けず劣らず弱々しいもので。

クロウは自分がどんなに情けない顔をしているのか、まったくわからなかった。

◇

川のほとりで言葉を交わすクロウたち。

その姿を、じっと見つめる人影があった。

「……」

仮面をかぶった、道化のような出で立ちの人物だ。
背中に生えるのは虹色に輝く六枚羽。
その道化は木立の間に身をひそめ、じっとふたりの動向をうかがっていた。
ふたりがもしもその存在に気付いたのなら、言葉を失っていたことだろう。
なにしろそれは……彼らが未来で出会った魔族、そのものだったからだ。
道化はふたりから目を離さぬまま――。
「……計画、続行」
ただ、そうとだけつぶやいて、夜風とともに姿を消した。

相反する少年少女がセカイを再構築する
ヒロイックファンタジー大作

2019年2月15日頃
全国の書店さまで発売！

著：霜野おつかい／イラスト：イセ川ヤスタカ